様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００２３０

研究課題名（和文）地域住民が愛着をもつ公共建築のつくり方　増田友也と渡辺豊和の現象学的空間論の解明

研究課題名（英文）How to make public buildings where local residents have attachment
Clarification of the phenomenological space theory of Tomoya Masuda and Toyokazu Watanabe

研究代表者
長岡　大樹（Nagaoka, Daiju）

富山大学・学術研究部芸術文化学系・助教

研究者番号：２０４５６４０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の成果を２点挙げる。１点目は、建築家の渡辺豊和（1938ー）が考案した「地域住民が愛着をもつ公共建築のつくり方」を解明したことである。渡辺は、公共建築を構想段階で、対象地域に伝わる「伝説・神話・昔話」から、地域住民が無意識のうちに欲している建築イメージを読みとっていた。そのイメージを自身の建築に投影し、変容することで、地域住民が愛着をもつ公共建築をつくっていた。
　２点目は、建築家の増田友也（1914ー81）が提唱した「Ethnos（原郷）」が、渡辺が地域住民から読みとっていた建築イメージと近い概念であることを明らかにした。結果、彼らに共通する現象学的な創作態度と建築空間論を解明できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究成果の学術的意義は、地域主義建築とは異なる、新しい公共建築の創出法を提案したことにある。ここでいう地域主義建築とは、木構造や木の表情を最善とし、地場産材を取り入れ、地域の典型的な伝統建築を模倣・参照して作られた建物のことである。これに対して本研究が示した方法を用いれば、建築の形態や空間を通して、直接、利用者の無意識や深層心理に働きかける公共建築を創出することが可能となる。
　本研究成果の社会的意義は、公共建築の創作に携わることの敷居を下げ、裾野を広げた点にある。本研究が示した方法を用いれば、専門家ではない人々が、愛着の持たれる可能性の高い公共建築のイメージを提示することが可能となる。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study is to clarify how to make public buildings where local residents have attachment designed by architect Toyokazu Watanabe , and the phenomenological space theory of architect Tomoya Masuda.
　There are two results from this research. The first is that I have clarified the "method of creating public buildings that local residents are attached to" designed by Toyokazu Watanabe. At the planning stage of a public building, Watanabe would read the architectural image that local residents unconsciously desired from the "legends, myths, and folk tales" passed down in the construction site. He would project and transform that image into his own architecture, creating public buildings that local residents would be attached to.
　The second is that we found that the concept of "Ethnos" proposed by Tomoya Masuda　is extremely close to the potential architectural image Watanabe had read from local public buildings.

研究分野：芸術理論

キーワード：公共建築　愛着

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近年、高度経済成長期に建設された公共建築が寿命を迎え、日本各地で公共建築の建替えが進んでいる。また東日本大震災以降、被災地や災害脆弱地において、生活環境の刷新が進められている。それに伴って真新しい公共建築を目にする機会が増えた。現代日本の公共建築は、十分過ぎる性能を有しながらも、地域性を反映した造形をしているとは言いがたい。どこに建っていても違和感のない造形や質感を有している。こうした地域表現の薄い公共建築に対して、地域住民は、愛着を抱くことは難しいのではないか。愛着を抱く以前に、利用する公共建築の形態や空間に興味を覚えることが少ないのではないか。こうした問題意識が、本研究の背景にはある。

新しい公共建築の計画が決まると、利用者となる地域住民は、誰もが、自分たちが愛着をもてる建物が実現することを望む。一方で、設計者側も、利用者に愛着を抱いてもらえるような建物をめざして計画を進める。では地域住民が愛着をもつ公共建築はどのような方法でつくればよいのか？　公共建築が地域や風土に合っているとはどういうことか？　本研究は、こうした根源的な問いに答えるために開始された。手がかりとしたのは、建築家の渡辺豊和（1938–、京都造形芸術大学名誉教授）と同じく建築家の増田友也（1914-81・京都大学名誉教授）の理論と実作である。彼らの仕事を解明し「地域住民が愛着をもつ公共建築のつくり方」を具体的に示すことをめざした。

２．研究の目的

本研究の目的は「地域住民が愛着をもつ公共建築のつくり方」を普遍的な方法として確立することである。その方法が、簡易で明快なものであればあるほど、専門家でない大人から子供まで、公共建築の大まかな完成イメージを導出できる可能性がひらかれると考えた。こうした方法を確立するうえで、参照したのが、増田友也と渡辺豊和の仕事であり、彼らの現象学的な建築思想と建築表現に着目した。

増田友也は 1950 年代後半から 80 年代初頭にかけて、渡辺豊和は 1980 年代から 90 年代にかけて、地方都市で、鉄筋コンクリート造の公共建築をいくつか手がけた。彼らが「地域住民が愛着をもつ公共建築」をめざして活動していたことは、その発言や言説から読みとることができる。

「地域住民が愛着をもつ公共建築」への関心は、増田が「Ethnos」という概念を導入し、論文にまとめたことに始まる。そして渡辺は、増田の問題意識を受けて「地域住民が愛着をもつ公共建築」を、全国各地の離島寒村で実現させた（龍神村民体育館、対馬豊玉町文化の郷、秋田市体育館等）。その建築造形は極めて独特であり、地域住民以外の人々が見ると、意外性に満ちたものではあるが、地域住民はその建物に愛着を寄せている場合が多い。

３．研究の方法

本研究は、増田・渡辺にならって、建築学・哲学・心理学を横断するかたちで進められた。増田は建築空間論に現象学（意識の哲学）を初めて導入したことで知られる。増田の思想を受けて渡辺は、地域住民が無意識に欲している建築イメージを導出する方法を独自に考案した。彼らは建築学・哲学・心理学の融合を試み、人間の無意識や深層心理に働きかける公共建築をつくろうとした。

本研究の実施方法は、以下の手順で進められた。

（１）増田友也、および渡辺豊和に関する基礎資料の作成、言説分析
（２）渡辺本人と増田関係者への聞き取り、口述記録の作成
（３）増田および渡辺が設計した公共建築の現地環境調査・現地住民へのヒアリング調査
（４）増田および渡辺の現象学的空間論と空間表現・設計手法の解明
（５）「地域住民が愛着をもつ公共建築のつくり方」の確立

以下に（１）～（５）の具体的内容を示す。

（１）基礎資料の作成と言説分析を行った。特に増田と渡辺それぞれの「作品リスト・著作リスト・活動年譜」を完成させた。増田の作品リストの内容は、①作品名称 ②所在地 ③着工年・竣工年 ④現存状況 ⑤増田の関与度 ⑥設計体制（協働組織・設計チーフ・構造家） ⑦特筆すべき内容、である。このうち不明であった部分を、本研究における関係者への取材（インタビュー）で明らかにし、リストを完全なものにした。これと同様の内容で、渡辺の作品リスト等を新たに作成した。あわせて渡辺に関わる言説の分析を行った。

（２）渡辺本人、京都大学増田研究室の関係者を対象に、聞き取りを行い口述記録を作成した。

（３）渡辺が手がけた公共建築を現地環境調査、現地住民ヒアリングを行った。調査物件は、①龍神村民体育館（1987・和歌山県）、 ②対馬・豊玉町文化の郷（1990・長崎県）、③角館町

立西長野小学校（1992・秋田県）、④秋田市体育館（1994・秋田県）、⑤加茂町文化ホール（1994・島根県）、⑥黒滝村森のこもれびホール（1995・奈良県）、⑦上湧別町郷土資料館（1996・北海道）、である。いずれ豊饒で有機的形態をした外観と、洞窟的・胎内的な内部空間が特徴である。現地調査では建物単体だけでなく、掲載雑誌の写真からは把握できない「建築と周辺環境（周辺風景）」との関係性を確認した。また現地で生活する地域住民や施設利用者への問いかけ（ヒアリング）を行った。さらに渡辺が手がけた建築の「愛着の持たれ方や心象風景」を検証し「建築空間の愛着の構造（成り立ち）」を解明した。
（４）言説・作品分析と現地調査を踏まえ、渡辺が考案した公共建築のつくり方を解明した。渡辺の設計法や空間表現は謎めいたものが多く、建築の分野では渡辺の個人的な嗜好や体質によるものと理解されてきた。渡辺独自の設計法のうち不明瞭であった、①対象地域の歴史や伝説への接近法、対象地域の建築欲求（共同幻想）と判断する基準、②解読した建築欲求（共同幻想）を地域住民に問いかける具体的方法、③伝説や昔話のコトバを建築形態へと飛躍・置換する方法、等を検討した。
（５）上記（１）～（４）で解明した内容を、具体的かつ実践的方法に編み直した。

４．研究成果

本研究の成果を２点挙げる。１点目は、建築家の渡辺豊和が考案した「地域住民が愛着をもつ公共建築のつくり方」を解明したことである。渡辺は、公共建築の構想段階で、建物が立地する地域に伝わる「伝説・神話・昔話」から、地域住民が無意識のうちに欲している建築イメージを読みとっていた。そのイメージを自身の建築に投影し、変容することで、地域住民が愛着をもつ公共建築をつくっていた。こうした特異な設計方法は、これまで知られておらず、渡辺本人もその方法を体系化していなかった。本研究は、こうした方法を詳細かつ具体的に明らかにした。

渡辺の公共建築はいくつかの段階を経て作られていた。その一部を挙げると（１）「伝説・神話・昔話」を選択する段階、（２）「伝説・神話・昔話」から適切なコトバを見出し、そのコトバをイメージへと変換する段階、（３）変換されたイメージは、いまだ建築ほど具体的ではなく抽象的である。この抽象イメージを建築空間というモノに転化する段階、（４）「伝説・神話・昔話」が取り入れられた公共建築が、実際、地域住民が潜在的に欲していた建築イメージなのかどうかを確認する段階。以上の諸段階について、対馬豊玉町文化の郷、加茂町文化ホール、秋田市体育館、上湧別屯田兵博物館の４棟を主たる事例として分析した。

２点目は、建築家の増田友也が提唱した「Ethnos（原郷）」が、渡辺が地域住民から読みとっていた潜在的建築イメージと極めて近い概念であることを明らかにした。その結果、渡辺と増田に共通する現象学的な創作態度と建築空間論を解明することができた。

本研究成果の学術的意義は、地域主義建築とは異なる新しいタイプの公共建築創出法を提案したことにある。ここでいう地域主義建築とは、木構造や木の表情を最善とし、できるかぎり地場産材を取り入れ、地域の典型的な伝統建築を模倣・参照して作られた建物のことである。それらは擬似木造建築の様相を呈することが多く、近年、こうした建物が増加傾向にある。実際のところ大規模な公共建築は、鉄筋コンクリート造、あるいは鉄骨造がつくられることが多い。本研究が示した方法を用いれば、建築構造の種類に関わりなく、その建築の形態や空間を通して、直接、利用者の無意識や深層心理に働きかける公共建築を創出することが可能となる。

本研究成果の社会的意義は、公共建築の創作に携わることの敷居を下げ、裾野を広げた点にある。本研究が示した方法を用いれば、公共建築の構想段階において、専門家ではない人々が、愛着の持たれる可能性の高い公共建築のイメージを、簡易なコトバや絵で提示することが可能となる。

なお本研究の途中、増田友也が設計した公共建築２棟（鳴門市民会館および鳴門市庁舎）の取り壊しが決まった。取り壊し決定に伴い、市民のあいだで巻き起こった感情や意識（愛着、葛藤など）について考察した。その内容は、当初予定していなかったが、地域住民の公共建築に対する愛着意識と心理構造の実際を検証するうえで有用であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 長岡大樹	４．巻 4月号
２．論文標題 中庭のある学校風景（連載 鳴門の建築遺産を考える ＃6）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 リビング鳴門 2019年4月号	６．最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長岡大樹	４．巻 5月号
２．論文標題 文化的な生活環境を求めて（連載 鳴門の建築遺産を考える ＃7）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 リビング鳴門 2019年5月号	６．最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長岡大樹	４．巻 9月
２．論文標題 増田友也が設計した鳴門市の公共施設群について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）	６．最初と最後の頁 739-740
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長岡大樹	４．巻 9月
２．論文標題 増田友也による建築空間の現象学的還元　厳島神社と未開民族の儀場における空間の自己同一的移行性と建築の仮設性	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集	６．最初と最後の頁 263-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長岡大樹	４．巻 9月号
２．論文標題 建築家・増田友也（連載 鳴門の建築遺産を考える ＃１）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 リビング鳴門 2018年9月号	６．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長岡大樹	４．巻 10月号
２．論文標題 増田友也の建築の見所（連載 鳴門の建築遺産を考える ＃２）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 リビング鳴門 2018年10月号	６．最初と最後の頁 22-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長岡大樹	４．巻 11月号
２．論文標題 鳴門市庁舎と市民会館のある風景（連載 鳴門の建築遺産を考える ＃３）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 リビング鳴門 2018年11月号	６．最初と最後の頁 24-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長岡大樹	４．巻 12月号
２．論文標題 園児のための空間を求めて（連載 鳴門の建築遺産を考える ＃4）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 リビング鳴門 2018年12月号	６．最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 長岡大樹	４．巻 1月号
２．論文標題 小学校に集う喜び（連載 鳴門の建築遺産を考える ＃5）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 リビング鳴門 2019年1月号	６．最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 長岡大樹
２．発表標題 鳴門の建築遺産を考える
３．学会等名 鳴門市市民会館アーカイブ展
４．発表年 2020年

１．発表者名 長岡大樹
２．発表標題 増田友也が設計した鳴門市の公共施設群について
３．学会等名 日本建築学会大会（北陸）学術講演会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関